



# 妖怪アマビエの正体

## はじめに

近年、日本では未曾有の大災害が続けざまにおこっています。東日本大震災といった大地震をはじめ、最近では台風による豪雨災害などで、これまでの常識では考えられない甚大な被害を受けました。そして、本年に至り新型コロナウイルスが、国内だけではなく、全世界に未知の恐怖をもたらしています。

もし、これらの災害を事前に予測することができたら、被害を大幅に軽減できるのではないかと考えるのが人情です。そして、それが叶わない場合、人々は人知を超えた超常的なものを求めるようで、アマビエという妖怪が注目を集めることになりました。

## アマビエとは？

アマビエとは、瓦版「肥後国海中の怪」に描かれたタイトル図の妖怪です。文面によると弘化3年

よく諸国へ相ふれ候様申置き何処ともなくうせにけり」と記してあったといえます。

続けて記事には、これは安政5年(1858)に江戸にコレラが流行したときに、何者かが売り歩いた札と同じもので、今どきこの様なものを信じて安心するものはいないと書かれています。

## 天彦、あま彦

要するにこうした札は、疫病が流行するなどして人心が乱れているのを幸いに、一儲けをたくらんだ輩の商売道具だったようです。

ちなみに、伊沢まさ子が配り歩いた札ですが、おそらくは図1の「予言獣ニ彦」と似たようなものだったと思います。文面はほぼ同じです、猿のような3本足の絵も描かれています。

しかし、これらの札の内容は、アマビエの札と酷似しているにもかかわらず、「アマビエ」や「あま彦」とありません。



図1:「予言獣 尼彦」明治時代(尼彦の出現を伝える肉筆画)／湯本豪一記念日本妖怪博物館(三次ものけミュージアム)所蔵

(1846)4月の中旬のこと。毎晩海中に光るものが出るというので、役人が出向いたところ、図のような長髪に鳥のようなくちばしを持ち、体はウロコのようなものに覆われ、足は3本という妖怪が現れました。そして、「私は海中に住むアマビエであり、当年より6年間は諸国豊作であるが、病気が流行するので自分の姿を写して人々にみせよ」と言って消えたといえます。しかし、アマビエという言葉の意味もよくわからず、この瓦版のほかにアマビエが現れたという記録も残っていません。それでは、アマビエとはいったい何者なのでしょう。妖怪研究の第一人者である民俗学者の湯本豪一氏の見解を中心にご紹介したいと思います。

## 怪しい3人組

平成11年(1999)に出版された湯本氏の著書『明治妖怪新聞』に

## アマビエの正体

では、「アマビエ」とは何者なのでしょう。ここで少し長くなりますが湯本氏の見解をご紹介します。

「光を発して海中に住むという天彦」の特徴は奇しくも『アマビエ』のそれと一致するのである。その『アマビエ』はというと、拙い絵ながら三本の足が確かに描かれている。これらのことから『アマビエ』が「天彦」のことであったのは間違いないだろう。

では、なぜ「アマビエ」という名称が生まれて来たのだろうか。「アマビエ」情報は書き写されて江戸に報告されていたことが瓦版に記されているが、これがすべての原因であろう。すなわち、最初は「アマビコ(天彦、あま彦)」と書かれていたものの、『天彦』『あま彦』の存在を知らない者がその情報を書き写すときに「コ」を似通った字の「エ」と転写してしまい、さらに原本が失われたことよってこの情報だけが後世まで残った。ここから『アマビエ』なる呼称が独り歩きし始めたと考えられるのである。言ってみれば、『アマビエ』などという妖怪は初めから存在しなかったのだ。誤解を生まないために、今

は、この稿のタイトルと同じ「妖怪アマビエの正体」というコラムがあり、明治14年(1881)10月20日付の『東京曙新聞』に掲載された「天彦なる怪物の札を売る」というタイトルの記事が紹介されています。

それによると東京は葛西金町の豪農板倉某方へ、3人の男が怪しい図を携えて押し入り、これは天保年間(1820-1828)に西海の沖に毎夜光りを発して現れた妖怪を写した図で、「我は海中に住みて天部の諸神に仕える天彦と申すものなり。今より三十余年の後に世界消滅する期にいたり人種悉く天災に罹りて尽ることあらん。その時我が像を写して軒毎に貼り置けば安楽長久の基とならん」と言って消えたが、ありがたいお姿であるから、村の全戸数分買って配れと、1枚5

銭で売りつけようとしたといえます。板倉は断ろうとしたのですが、どうしても引き下がらないので、しかたなく7、8枚を買って追いついた。後「アマビエ」という名称は避けるべきではないだろうか。

## 流行ってしまったアマビエ

このように湯本氏は、「コ」と「エ」の書き間違えだと指摘しており、間違った名前なのだから訂正しようと呼びかけていました。

しかし、湯本氏の見解に反して、時を経た現代においてアマビエは流行ってしまった。それはおそらくは瓦版に描かれた下手糞な絵が、意外に可愛くみえたこと。そして、「アマビエ」という意味の通らない名前が、訳の分からない姿の怪物に似合ったことが原因でしょう。

## がんばって考えました

ちなみに、湯本氏は字の書き間違えて「アマビエ」が生まれたとしていますが、もう一つの可能性として新しい妖怪を生み出そうと、がんばって考えた者がいたような気がします。なぜなら、アマビエの絵にはそれなりの工夫が偲ばれるからです。

例えば図2の「尼彦入道」です。これも「天彦」などと同じ予言獣ですが、体がウロコのようなものに覆われていることなど、アマビエと似ています。

この図2の尼彦入道と図1の尼彦を参考に、一方からはウロコと鳥

そうですが、記事のおわりに「此でんにて欺き歩くことはこのみに限らず府下近村にていくらもありのこと早く駆除したきものなり」とあり、このような輩が横行していたことがわかります。

## コレラ除け

さらにもう一つ。明治15年(1882)7月10日付『郵便報知新聞』には、東京・本所外手町に住む伊沢まさという後家が、コレラ除けの札を配り歩いたといえます。

その札には、「下には猿に似たる三本足の怪物を描き、其上に平仮名を以て『肥後国熊本御領分真字郡』と申処に光り物夜な夜な出て猿の声にて人を呼ぶ、同家中柴田五郎右衛門と申者見届候処、我等は海中に住むあま彦と申者なり、当年より六ヶ年豊作、しかしながら諸国病多く人間六分死す。然れども我等の姿をかきしるすものは病氣にあはず。此事



図2:「尼彦入道」明治時代／湯本豪一記念日本妖怪博物館(三次ものけミュージアム)所蔵

のような容姿を、もう一方からは3本足と毛深い姿を取材して、足して割ったような怪物を考え出し、それに名前を少し変えて「アマビエ」としたのかもしれない。

## おわりに

「天彦」か「アマビエ」か。いずれにせよ、元々は人心に付け込んだ商売の道具だった可能性が高いと思います。それが現在では人々に愛されるキャラクターになるとは、アマビエの作者も夢にも思わなかったでしょう。

しかし、不穏な世情につけこむ輩がいるのは昔も今も同じことです。最近のトイレットペーパー買い占め騒ぎなどでも見られたように、恐ろしいウイルス禍にいる私たちの心は、非常にもろい状態にあります。このような状況下だからこそ、あやふやな情報に惑わされないように、行動したいものです。

(文：江口知秀)



タイトル図:アマビエ(「肥後国海中の怪(アマビエの図)」(京都大学附属図書館所蔵)部分)